

解説 赤穂義士の吉良邸討ち入りを記した詩。

赤穂義士事録（頼山陽）

元禄 壬午 十二月

維十四日 夜 大いに 雪ふる

雪を 排する 四十六条の 鉄

仇家の 門を 研つて 門閥 折る

白雪は 化して 模糊の 血と 為る

血戦 何ぞ 覚えんや 手轍 裂するを

唯 恐る 隣竈の 草竊と 認むるを

使を 遣わし 辞を 致して 唐突を 謝す

隣方に 客を 会して 燭跋を見る

敢えて 為さんや 纓冠と 披髪とを

客は 使者と 素より 交結

出でて 観れば 快剣 虎穴を 挾む

凍月 空に 在り 光下 徹す

剣華 雪に 和して 眼纏らんと 欲す

通釈 元禄壬午十二月十四日の夜は大雪が降った。その雪を排して吉良邸の門を切り離した。白雪は血で染まるであろう。死を賭しての戦いを前に手の轍は裂けた。この討ち入りで恐れたのは隣家に対して申し訳ない気があり、事情を述べて唐突な討ち入りを謝したところ、灯火を消し、黙殺するとのこと。隣家と使者はすでに交結していた事が幸いした。主君の仇討ちは見事成し遂げ。天を仰ぐと凍える様な月の光が貫き通り、そして、剣の輝きが雪と和み眼が霞んでならない。